

# 平城遷都と国家官寺の移転

## 大橋一章

### はじめに

和銅三年（七一〇）三月十日、都は藤原京から平城京に遷った。

藤原京へ遷都したのは持統八年（六九四）十二月六日であったから、藤原京はわずか十六年足らずの短命な都ということになる。遷都に際しては大土木工事を実施して条坊街区を造成し、一方では多くの建物、小は住民の住居から大は仏教建築のような巨大なものまで建てなければならず、十六年弱で新都を建設するのはいささか勿体無きことであった。

しかしながら短期間に土木工事や建築工事を繰り返せば、工事に従事する工人の技術を促進させることはまちがいない。この小論では、平城遷都にしたがい平城京へ移転した国家官寺の造営について検討してみたい。この国家官寺とは藤原京四大寺と称された大官大寺・薬師寺・川原寺・飛鳥寺のことで、川原寺をのぞく三寺が平城京へ移転した。平城京移転後、大官大寺は大安寺、飛鳥寺は元興寺

と称され、川原寺に代わって藤原氏の興福寺が第四の国家官寺として登場する。ここでは天下第一の大安寺と元興寺、さらに藤原氏の興福寺を取り上げたい。

### 一 平城遷都

平城京は奈良盆地の北端に位置し、東西四・三キロ、南北四・八キロの主体部に張出し部分の東西一・六キロ、南北二・一キロの外京が加わる計画都市で、中国風の大規模都城と呼ぶに相応しいものであった（図）。『続日本紀』慶雲四年（七〇七）二月十九日条には、「諸王臣の五位以上に詔して遷都の事を議らしめたまふ」とあり、翌和銅元年（七〇八）二月十五日には平城遷都の詔を天下に告げ、和銅三年三月十日に都を平城に遷したという。

『続日本紀』によると、遷都のことを議せしめたのは遷都の三年前の慶雲四年二月のようである。そうすると、かつて岸俊男氏が主張したように藤原京の中ッ道と下ッ道を東西幅とする京域を、中ッ

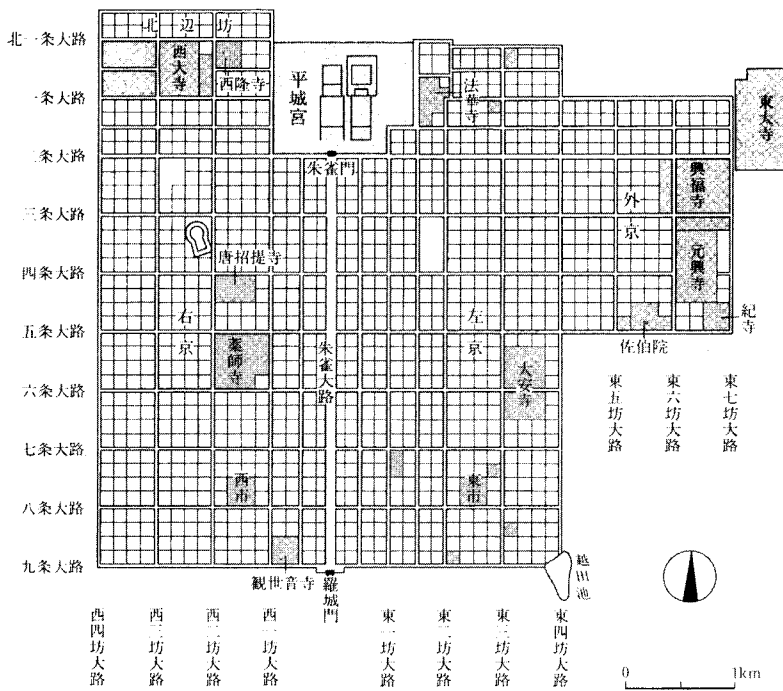


図 平城京

道と下ツ道に沿わせて奈良盆地の北部に移動させ、下ツ道を基軸に西側に折り返して平城京主体部の東西幅となる基本計画<sup>1)</sup>がまず作成された。天皇の居所たる内裏や国家儀式の場である大極殿、さらに中央官庁の建物からなる平城宮を平城京主体部の北端中央部に配し、東西八坊、南北九条の南北にやや長い条坊区画が固まり、さらにその東辺の一条から五条に東西三坊の外京とよぶ張出し部分を付加した平城京の輪郭が定められた。

こうして平城京の都市像が完成するころであろうか、和銅元年二月十五日には「平城の地、四禽図に叶い、三山鎮を作す」と宣した遷都の詔が天下に発せられた。翌三月十三日には石上麻呂が左大臣、藤原不比等が右大臣、大伴安麻呂が大納言、小野毛野と阿倍宿奈麻呂、中臣意美麻呂が中納言となったが、この任官は遷都事業を推進させるためのものであった。この人事で藤原不比等は第二位の右大臣になったが、高嶺正人氏によるとこのとき第一位の石上麻呂より十八歳若い五十一歳の藤原不比等こそが議政官中第一の実力者であったという<sup>2)</sup>。とすると、藤原不比等が平城遷都の事実上の推進者ということになる。

『続日本紀』は前述の和銅元年三月十三日の任官記事の後半で、大藏・宮内の任官につづいて造宮に大伴手拍を任命したことを伝えている。平城宮造営のため令外の官司の造宮省が設置され、このときその長官人事が決まったのである。大伴氏はもともと軍事を掌る氏族で、多くの技術者や諸国から徴収した役民を管理使役する造宮

卿の任務は軍事的手腕を有した大伴氏の得意とするところで、平城宮造宮が順調に遂行されることを期待しての任官であった。この大伴手拍の造宮人事は、遷都事業が天皇の内裏や中央官庁などの平城宮の建物工事から着手されたことを物語るものであろう。

その後九月二十日に元明天皇は平城に巡幸してその地形を觀たが、九月三十日には平城京造宮のための組織が固まったのか、造宮省のトップ人事に遅れること六か月にして造平城京司の任官があった。

当日任官されたのは長官に阿倍宿奈麻呂と多治比池守、次官に中臣人足、小野広人、小野馬養、大匠に坂上忍熊、判官七人、主典四人であった。長官二人の人事は造寺司の長官人事ですでに前例があったが、六か月前の和銅元年三月十三日の任官で、阿倍宿奈麻呂は議政官の中納言に、多治比池守は民部卿になっていた。したがって両者とも兼任ということになるが、前者の場合は遷都事業を推進する議政官の一人で現場の、つまり執行機関たる造平城京司の長官をも兼ねたのである。阿倍宿奈麻呂の人事から、遷都事業にかける藤原不比等をはじめとする議政官たちの決意を汲み取ることができる。また、次官の一人に起用された中臣人足は藤原氏の一族であったから、この人事にも藤原不比等の遷都事業にかける熱意を感じることができよう。

こうしてみると、平城宮の建築工事を担当する造宮省では和銅元年三月にトップ人事が決まっていたから、建築資材の確保を経て、内裏や官庁の建物の部材や礎石の加工などをはじめ、平城宮内の建

築予定地の地割や基壇造成等の基礎工事は順調に進んでいたと思われる。一方、造平城京司の幹部人事は六か月遅れとはいえ九月末には決まったため、平城京の条坊街区の測量もはじまり、年内には造成工事もはじまっていたのかもしれない。

元明天皇はこのような平城宮の造宮工事の進捗状況を見て、造平城京司の幹部人事を発した二日後の十月二日には宮内卿犬上王を伊勢太神宮に遣わして幣帛を奉り、平城宮の造宮状況について報告させた。また十一月七日には平城京の域内に入る菅原の地の九十余の民家を、布穀を給して移転させた。そして、平城遷都の詔を發して十か月後の十二月五日には平城宮の地鎮祭がおこなわれた。

これよりいよいよ本格的な工事がはじまったと思われるが、造宮省はこの地鎮祭を機に、それまでに終えていたであろう基礎工事に代わって本格的な建築工事を開始したのであろう。たとえば平城宮の正殿ともいふべき大極殿と天皇の内裏は真っ先に建てはじめたと思われる。大極殿は規模壮大な建築で、飛鳥寺以来建てられてきた仏教建築の金堂や講堂のような意匠を見せ、高い基壇を造成して礎石を据え、その上に大きな柱を建てて梁や桁を架け、何百トンもの瓦葺大屋根を支える巨大木造建築であった。もちろん朱・黄・緑の彩色鮮やかな建築である。このように記すと、大極殿はあたかも仏教建築の金堂や講堂を摸したかのようであるが、事実はその逆である。

古代中国では西暦紀元ごろインドの仏教が伝わると、中国伝統の

彩色鮮やかな巨大木造建築の宮殿建築や役所建築を手本に、仏像安置のための仏殿や經典講読のための講殿、さらに仏舍利安置の仏塔を建てることになった。このような中国伝統建築を転用した仏教建築が建てられるようになった正確な年代はわからないが、中国仏教美術の最初の黄金期ともいえるべき南北朝時代の北魏の洛陽城の栄華を見つけた楊銜之は『洛陽伽藍記』の中でつぎのように記している。すなわち、洛陽の繁栄を象徴する靈太后の永寧寺の仏殿は、「形、太極殿の如し」と。仏殿はわが国の金堂に該当するものだが、『洛陽伽藍記』はその仏殿の形状が仏教伝来五百年にして、未だ当初手本とした中国伝統の宮殿建築の形状を踏襲していたことを証する貴重な史料といえよう。

このような中国仏教建築が半島の百済を介し、さらにいえば敏達六年（五七七）来日の百済の造寺工によって伝えられ、わが国の造寺工が育成され、わが国初の中国仏教建築を擁する飛鳥寺が造営されたのである。そして百年後の七世紀末に、わが国初の非仏教建築として建てられた中国伝統の彩色鮮やかな巨大木造建築が藤原宮の大極殿であった。

こうした藤原宮の大陸様式の建築は木下正史氏によると、大極殿、朝堂院、宮城門、大垣にかぎられ、官衙建築には及んでおらず、内裏では堀立柱建物の檜皮葺屋根などのわが国伝統の建築様式であったという。藤原宮の巨大木造建築の造営工事を担当したのは、もともとは勅願寺造営集団の造寺工の流れを引き、律令制の確立とともに

にその中に組み込まれ、やがて藤原宮造営の造宮省に配属された、いうなれば官宮工房のエリート工人たちであった。彼らは藤原宮につづき平城宮の大極殿をはじめとする非仏教建築の建立にも従事し、これによってエリート工人たちの腕はますます磨かれることになったのである。

さて、先述のように平城宮の大極殿は和銅元年十二月五日の平城宮地鎮祭のあと本格的な建築工事がはじまったと思われるが、私見によると、中国伝統の彩色鮮やかな巨大木造建築の、たとえば金堂、講堂、仏塔などの一堂塔を建立するのに平均四年はかかっているから、仏教建築と同じ巨大木造建築の大極殿の場合も少なくとも四年以上の工期をかけ、和銅五、六年ごろには完成していたと思われる。したがって、和銅三年三月十日の遷都のときには、大極殿はまだ造営中であつた。遷都の当日の『続日本紀』の記述は「始めて都を平城に遷す」としかなく、何とも愛想がない。このとき平城宮も平城京もまだ造営途中であつてみれば、素っ気ない『続日本紀』の書き振りも仕方がないのかもしれない。

ところで、藤原京四大寺の首位にあつた大官大寺は藤原京の左京、また次位なる薬師寺は藤原京右京に建てられていた。この天下第一、第二の国家官寺は平城京でもそれぞれ左京と右京に移転した。天下第三の川原寺は新京に移転せず、そのまま飛鳥の地にのこつたが、第四の飛鳥寺は新京移転後には元興寺の寺号が一般化するが、移転先は平城京の東の張出し部分の外京の地であつた。この張出し部分

を平城京に取り込んだ経緯についてははっきりしないが、興福寺の建つ外京の地は地盤が固く、かつ高台であった。南は三条大路を境に崖となり、はるか遠くの大和三山や二上山を見晴らすことができ、一方西へ目を転ざると平城京全体を見渡すことができた。つまり、平城京随一の形勝の地に興福寺は建つのである。

興福寺は『興福寺流記』所引の「宝字記」によると、その前身は厩坂寺で、さらに鏡女王の山階寺にまで遡るというが、その実態となるとよくわからない。<sup>7)</sup>あまり素性のはっきりしない藤原氏の寺院が平城遷都のどさくさ紛れに、突如平城京随一の形勝の地に登場したのである。

この興福寺の登場について、私はつぎのように推測している。すなわち、平城遷都計画を策定していた藤原不比等は、基本計画案の中ツ道と下ツ道を藤原京の東西幅とする京域を、中ツ道と下ツ道に沿わせて北方の平城の地まで移動させると、平城第一の形勝の地が平城京主体部に含まれないことに気づいた。そこで不比等が形勝の地を平城京に取り込むために案出したのが外京であった。こうして不比等は平城京随一の形勝の地に藤原氏の氏寺たる興福寺を建立することにした。おそらく、当代一の実力者不比等は、興福寺を藤原京四大寺のうち唯一移転しなかった川原寺に代わる第四の国家官寺にすべく画策したのであろう。

## 二 大安寺の平城京への移転

平城京への移転に際し、国家官寺では天下第一に位置づけられていた大官大寺、すなわち大安寺は左京六条四坊の地に移転した。ところが、『統日本紀』靈龜二年（七一一）五月十六日条には「始めて元興寺を左京六条四坊に徙し建つ」とあり、元興寺はあたかも大安寺と同所に移転してきたごとくで腑に落ちない。福山敏男氏によると、元興寺は二年後の『統日本紀』養老二年（七一八）九月二十三日条に「法興寺を新京に遷す」と、法興寺の寺号で移転記事が書かれており、一方大安寺が左京六条四坊にあったことは事実だから、『統日本紀』靈龜二年の移転記事は元興寺ではなく大安寺のことだといふ。<sup>8)</sup>

このような福山氏の見解は妥当な解釈と思われるが、すると大安寺は靈龜二年に平城京に「徙し建つ」ということになる。和銅元年（七〇八）二月に平城遷都の詔が発せられると、造宮省は内裏や中央官庁の建物を建立し、一方の造平城京司は平城京の条坊街区を造成した。しかしながら、和銅三年三月十日の遷都の時点で、天皇の居所たる内裏の建物は完成していたが、平城宮最大の彩色鮮やかな巨大木造建築の大極殿は建築中で、平城京の条坊街区も同じく造成中であつた。大安寺の移転という靈龜二年は遷都から六年を経ているので、そのころには条坊街区の工事も一段落していたのであろう。

『続日本紀』靈龜二年の大安寺の移転記事は、藤原京四大寺の移転の中でもっとも早い。この大安寺の移転に関して、太田博太郎氏が興味深い見解を述べている。すなわち、百濟大寺―高市大寺―大官大寺は天皇家の持仏堂のような性格をもった天皇家の私寺で、宮とともに移ったのではないかと感じられる。したがって、大官大寺、つまり大安寺はどの官寺よりも先に新京である平城京に移されなければならなかったであろう、と。

『続日本紀』には「始めて元興寺（大安寺）を左京六条四坊に徙し建つ」とあるが、この「徙し建つ」が移転工事の着手か完成かといえ、私見によると寺院の一堂塔の造営期間は平均四年、全伽藍の完成にはおよそ三十年もかかるため、靈龜二年完成の場合は工事の着手が天武朝まで遡るからまずあり得ない。一方、靈龜二年が移転工事着手の場合はつぎのように考えている。すなわち、大安寺は天下第一の国家官寺であり、移転先も平城京の都市像が策定されたころには天下第二の薬師寺とともに左京と右京に配置されることが決定していた。和銅元年九月に造平城京司のトップ人事が決まり、平城京の条坊区画を測量し造成工事も活発化すると、大安寺・薬師寺の寺地の全貌も現実味が増してきた。その時期がいつであったかはわからないが、大安寺ではまず新伽藍が設計された。設計が決まるとそれに則り測量整地がおこなわれ、やがて基壇が築造され、礎石の加工と据えつけの工事がつづく。以上とは別に建築資材の木材を調達、ついで乾燥し、柱や梁などに加工する木造りがはじまり、

さらには大量の瓦がつくられる。私見によると瓦はともかくここまでの基礎工事にはおよそ五年はかかるから、基礎工事は和銅四年にははじまっていたのであろう。基礎工事が終わるといよいよ堂塔が建ちはじめる。基壇上の礎石に柱が立つ建前である。「始めて……徙し建つ」は土木工事の開始や木造りの開始よりも、現に柱を建てはじめる建前のことと思われる。新京における大安寺の移転工事で、最初に建てられたのはおそらく金堂であろう。

このように、私は『続日本紀』の靈龜二年五月十六日にはじめて左京六条四坊に大安寺を「徙し建つ」とは、大安寺金堂の建前であったと解している。その後の大安寺金堂の工事の進捗状況を伝える文献史料は何もないが、私見による古代寺院の堂塔一字の造営期間は平均四年であるから、養老四年ごろには完成していたと思われる。

翌養老五年十二月七日に、平城遷都を実行し、すでに氷高内親王に譲位していた元明天皇が崩御した。元正天皇は、母の太上天皇の一周忌法要のために経典を書写させ、仏具をつくらせたが、天平十九年（七四七）の『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』（以下『大安寺縁起』）には養老六年十二月七日、つまり一周忌法要の当日に元正天皇が供養具を施入したことが書かれている。これらの供養具を供えて一周忌法要を施行できる堂宇、すなわち金堂が完成している。ところが、元正天皇は供養具を大安寺に施入したのであろう。

ところで、大安寺の平城移転工事には遣唐留学僧の道慈が携っていた。『続日本紀』天平九年四月八日条の道慈の奏上には、「天勅を

奉けたまはりて、この大安寺に任せられて修め造りてより以来」とあり、この天勅は天平十六年十月二日条の道慈卒伝に、「大安寺を平城に遷し造るに、法師に勅してその事を勾当せしめたまふ」に当たると。道慈が大安寺の平城移転工事に従事していたことは間違いあるまいが、卒伝にはさらに「法師尤も工巧に妙なり。構作形製、皆その規摹を襲く。有らゆる匠手、歎服せぬは莫し」と書かれている。道慈の工匠としての腕前は相当のものであったようだが、今となってはそれを確かめる手立ては残念ながら何もない。

また、道慈が大安寺の移転工事にいつから従事したかについては、『扶桑略記』や「大安寺碑文」に天平元年とある。私見によると大安寺で最初に建立されたのは金堂で、養老四年ごろに完成していた。その後およそ四年をかけて講堂が神龜元年（七二四）ごろに、さらに食堂が神龜五年ごろに完成する。すると道慈が大安寺造営に携わったという天平元年には、仏塔をのぞくと巨大木道建築の金堂・講堂・食堂はすでに完成していたのである。そうすると道慈が関わった建物としては、南大門・中門・回廊・僧房、そして東西の仏塔ということになるのか。

太田博太郎氏が作成した大安寺平面図<sup>15)</sup>によると、回廊は複廊で金堂に取り付き、同時に四か所で延びて、講堂の北から回廊の東西にまで連なる僧房に取り付く。さらに講堂と食堂・僧房が軒廊でつながっている。つまり、平城京大安寺の主要伽藍を構成する金堂・講堂・食堂・僧房は回廊と軒廊で互いにつながっていたのである。道

慈の大安寺「修造」とは回廊と軒廊で主要堂宇すべてをつないで一体化したことではあるまいか。

さて、天平元年以降大安寺では、道慈も参加して中門と回廊が造営されたと思われる。『大安寺縁起』によると、天平八年に聖武天皇が羅漢図像九十四軀、金剛力士形八軀、梵王・帝釈・波斯匿王・毗婆沙羅王像をつくって回廊と中門に請坐したようである。毛利久氏によると、これらの仏像はいずれも画像で、羅漢像九十四軀は回廊の壁面に、金剛力士形八軀以下は中門の壁面に描かれていたという<sup>16)</sup>。先の太田氏は、大安寺の中門や回廊に壁画を描く荘嚴や建物の配置は他とかなり異なった特色であるとして、道慈の「修造」とはこうした新しい面を加えたところから出たのではないかと述べている<sup>17)</sup>。

中門と回廊に壁画が描かれた天平八年までに、中門と回廊は完成していたのであろう。さらに天平十四年には南中門の塑像の四天王像二具がつくられ、同じ年に金堂の乾漆の六色菩薩二軀と乾漆の羅漢像十軀、乾漆の八部衆像一具がつくられた。金堂の乾漆諸像の制作は、百濟大寺から高市大寺へ、そして平城京大安寺へ運ばれた天智天皇奉造請坐という大安寺根本本尊の乾漆の丈六釈像と、同じく乾漆の四天王像を荘嚴するものであった。金堂の仏像すべてを根本本尊と同じ乾漆像で統一するとは、天平の造仏工のセンスはなかなかのものといえよう。

この天平十四年という年は中門と回廊が完成した天平八年から六

年を経ているから、この間に合わせて十三条という僧房と軒廊、さらに南中門が造営されたのではなからうか。つまり天平十四年は靈龜二年の大安寺を「徙し建つ」から二十七年目となり、大安寺の主要伽藍たる金堂院・講堂・食堂・僧房などが完成し、大安寺の平城移転の第一期工事が終わった年といえよう。

最後に大安寺の仏塔についてだが、天平十九年の『大安寺縁起』には寺地が合計で十五坊、その内訳は「四坊塔院、四坊堂并僧房等院、一坊半禅院食堂并大衆院、一坊池并岳、一坊半賤院、一坊苑院、一坊倉垣院、一坊花園院」とあって、塔院は四坊を占めていた。ところが他の建物は門・堂・樓・廊・僧房・屋ごとに記されているにもかかわらず、仏塔については何ら記載がない。それゆえ、先述の毛利氏は天平十九年の時点で仏塔はまだ完成していなかったが、その後あまり降らないころに完成したと述べている。<sup>13)</sup>

天平十四年までに大安寺の中枢伽藍たる金堂院をはじめ講堂・食堂・僧房などが完成していたから、大安寺の平城移転工事は天平十四年には一段落していたのである。その後、つまり天平十五年以降大安寺の第二期移転工事として、四坊の塔院の造営工事がはじまったと思われる。大安寺の仏塔は東西二基建っていたから、二塔を完成させるにはおよそ八年はかかり、天平勝宝二年（七五〇）ごろには完成していた。『大安寺縁起』成立の天平十九年までにおそらく一塔は完成していたが、もう一塔は造営中であつたことから、『大安寺縁起』は塔院の広さだけを記して仏塔については何も記さなかつたのであろう。

こうしてみると、大安寺の移転工事は金堂の建前の靈龜二年を遡る五年前の和銅四年にははじまっていたから、天平勝宝二年まで三十九年間かかっていたことになる。もっとも天平十四年に大安寺の主要伽藍の移転工事は終了しており、天下第一の国家官寺としての活動はこのときから充分機能していたと思われる。

### 三 元興寺と興福寺の平城京への移転

元興寺は、わが国初の本格的伽藍を擁した飛鳥寺にまで遡る。平城遷都にともない、すでに国家官寺に列せられていた飛鳥寺も新京に移転することになり、飛鳥寺の法号であった元興寺が平城京における寺号となったと思われる。この寺にはさらに法興寺という法号もあつたようで、三者の関係は今一つはっきりしない。<sup>14)</sup>

『続日本紀』には靈龜二年（七一六）五月十六日に「始めて元興寺を左京六条四坊に徙し建つ」とあるが、この左京六条四坊の地は大安寺の建つところであるから、この元興寺は大安寺の誤りとする福山説についてはすでに前章で述べたところである。『続日本紀』はこの二年後の養老二年（七一八）九月二十三日条に「法興寺を新京に遷す」と記す。この養老二年という年は薬師寺の移転と同じ年である。

『続日本紀』は養老二年の元興寺の移転記事のほかに、この寺の



具体的な移転工事の経過については何も記さない。この養老二年の「新京に遷す」が、先の大安寺や薬師寺と同様に金堂の建前と解すると、元興寺の場合もこの建前の前に五年間ほどを寺地の測量整地や基壇の造成、礎石の据えつけ、これらとは別に木材の調達や乾燥・木造りという基礎工事にかけていたことになろう。するとこうした基礎工事、つまり元興寺の平城京における移転工事の開始は和銅六年（七一二）ごろと思われる。

一堂塔の造営期間を平均四年とする私見によると、まず金堂は養老五年ごろ完成し、つぎに講堂は神龜二年（七二五）ごろに完成し、さらに中門と回廊が天平元年（七二九）ごろ完成したのではなからうか。『日本靈異記』には、天平元年二月八日に聖武天皇が元興寺で大法会を備けたことが記されている。<sup>15</sup> 私は、国家官寺たる元興寺の中枢伽藍を構成する金堂・講堂・中門、そして金堂を囲むように中門から講堂に連なる回廊が完成したことから、天皇は法会を主催することになったと解している。もちろん弥勒殿と書いた額を掲げていた金堂の本尊の丈六の弥勒坐像は金堂の竣工に合わせて養老五年ごろに完成していたと思われる。

そのほか元興寺には巨大木造建築の十一間四面の食堂があった。また僧房はそれぞれ小子坊をとまなう大坊が東西に二字ずつ、合わせて四字あった。食堂に四年、四宇の僧房に四年、そして南大門に四年を想定すると、天平十三年ごろには元興寺の平城京移転工事はひとまず終了したのであろう。

ところで、元興寺の伽藍中軸線上には先述のように、南大門・中門・金堂・講堂が並び建ち、複廊の回廊が中門の両脇から講堂の両脇に連なっていた。回廊の中に建つ金堂は五間四面で他の官寺と同じであるが、講堂は九間四面もあって、他の官寺よりも一段と大きかった。以上の中枢伽藍の東南に東塔院、西南に西小塔院がほぼ対称に配されていた。この両者は中枢伽藍の造営、つまり元興寺の平城京移転工事とは関係なく、移転工事の終了した天平十三年以降のある時期に、同時に計画され、そして建立されたと考えられる。

というのも、西小塔院には八万四千の百万塔が安置されていたからである。この百万塔は称徳天皇が天平宝字八年（七六四）惠美押勝の乱の悔過として、百万基の木製の小塔をつくることを発願したが、宝龜元年（七七〇）四月二十六日に完成し、諸寺すなわち国家官寺をはじめとする十大寺に分置したものである。元興寺ではこれを安置するための小塔院を計画することになった。建立地として元興寺の中軸線上を占める中枢伽藍の東西の空地を候補としたが、東大門と西南大門の邪魔にならないように寺地の東南角と西南角の二か所を建立予定地とした。

おそらく元興寺では、百万塔分置のための小塔院を東南角か西南角のいずれに建てるべきかが議論されたが、候補地が二か所あったことから小塔院のほかに五重塔を中心とした塔院の計画も浮上したのであろう。その結果、東塔院と西小塔院の二つの院を東西対称に建立することになった。小塔院の造営は百万塔発願の天平宝字八年

以降であろうから、順調に建立されていれば百万塔完成の宝亀元年四月には完成していたと思われる。一方、五重塔は昭和二年（一九二七）の塔跡の発掘調査で鎮壇具とともに皇朝十二銭の神功開宝が発見されており、この発行年が天平神護元年（七六五）であることから、太田博太郎氏は五重塔の建立はこれ以後という。私は、五重塔は宝亀元年の小塔院完成以降の造営で、宝亀五年ごろの完成と考えている。

つぎに、興福寺の平城京移転について述べてみたい。第一章でも少しふれたように『興福寺流記』所引の「宝字記」によると、天智八年（六六九）に藤原鎌足の夫人の鏡女王が鎌足の病に際し、鎌足のつくった丈六釈迦三尊像を設置する山階寺を建てた。その後この寺は飛鳥遷都にともない高市厩坂に移され、厩坂寺といい、さらに平城遷都のとき平城京春日の地に移して興福寺と命名したというのである。山階寺も厩坂寺もともに実態となると今一つ不明で、両者の寺院址は今も確認されていない。したがって、私は興福寺の前身寺院という山階寺と厩坂寺に対してはかぎりなく懐疑的なのである。

私は、平城遷都の最高責任者で、しかも当代一の実力者であった藤原不比等が、平城京随一の形勝の地を逸早く確保し、そこに藤原氏初の本格伽藍の寺院として興福寺を創立したのではないかと考えている。つまり、山階寺や厩坂寺は興福寺の創立に際してより権威づけるために、藤原氏の始祖たる鎌足にまで遡及する縁起を創作したとき生じたものということになるか。不比等のような実力者で

あればこそ、藤原京四大寺の第三位の川原寺が飛鳥の地にとどまったことから、川原寺に代わって藤原氏の興福寺を第四の国家官寺とすべく画策したのであろう。こうして天武朝以来すでに令制に組み込まれていた官寺造営組織のエリート工人たちを興福寺造営に駆り出し、興福寺造営集団なるものをつくって造営にあたらせたのである。国家官寺の造営を担当する造寺司は、造寺工の造塔官と造仏工の造丈六官の二つのグループからなっていたが、興福寺造営組織の場合も造寺工のグループと造仏工のグループからなっていたのである。

太田博太郎氏が作成した平城京に移転してきた国家官寺の伽藍復原平面図<sup>19</sup>を参照すると、興福寺は国家官寺の大安寺・薬師寺・元興寺と同じく金堂は五間四面、講堂は七間四面、回廊は複廊である。

また、中金堂安置の本尊は他の国家官寺と同じ丈六仏であった。そのほか興福寺には五間四面の金堂が二宇、東金堂と西金堂があつていずれも丈六仏を本尊とした群像で荘嚴されていた。こうしてみると興福寺は建物の規模や数で、また仏像の大きさや数でも国家官寺と同等か、それらを超えていたのである。現在このような天平建築や天平彫刻のほとんどは現存しない。しかし、わずかに伝わる西金堂の八部衆像や十大弟子像の優秀さは誰もが認めるところである。これらの仏像は西金堂の本尊のような主役級の仏像ではなく、脇役の群像の一部であることを思えば、天平仏師たちの卓抜な技量を改めて認識するのである。

このように、興福寺の建築や仏像は平城京に移転してきた国家官寺の建築と仏像の規格に合わせて造営したのである。すなわち、金堂は五間四面、本尊は丈六仏、講堂は七間四面、回廊は複廊という国家官寺規格にである。一氏寺の興福寺がこのようになり得たのも、ひとえに不比等という権力者がいたからにほかならない。平城京時代の中金堂や東金堂・西金堂には、現存の八部衆像や十大弟子像から想像するに天平彫刻の最優品が安置されていたのであろう。

興福寺の中樞伽藍は中門・金堂・講堂が南北に並び、回廊が中門の両脇から金堂の両脇に連なる一画で、この中樞伽藍は興福寺の平城京における最初の造営工事がはじまったところでもある。

最近小林裕子氏は、『興福寺流記』所引の「旧記」が和銅三年（七一〇）に「興福之伽藍を立つ」と記すことから、中金堂は和銅三年着工、和銅六年完成、講堂は和銅七年着工、養老元年（七二七）完成、中門・回廊は養老二年着工、養老五年完成という中樞伽藍の造営プログラムを発表している。<sup>20</sup>小林氏のいう着工は私のいう建前のことであろうから、当然ながらこれ以前に基礎工事の期間が必要であった。そもそもこの和銅三年は遷都の年で、平城宮ではまだ大極殿は建築中であった。他の国家官寺は条坊街区の完成を待って移転工事ははじめたようである。興福寺の平城京における造営開始は突出している。

しかしながら、それだけ不比等が興福寺創立にかける熱情は強烈で、公私混同も桁ちがいであったのであろうか。測量整地、基壇の

造成、礎石の据えつけ、さらに木材の調達や乾燥、木造りという基礎工事は最少二年、平均五年はかかる。すると興福寺の基礎工事は、遷都の詔が発せられた和銅元年にはじまっていけば三年間、また遷都のことを議らした慶雲四年（七〇七）なら四年間を要したことになる。不比等が遷都事業の推進者であればこそ、興福寺の造営工事の開始時期や先述のエリート工人の動員も意のままになったのであろう。

さて興福寺には中樞伽藍の外側、つまり東に東金堂と五重塔、西に西金堂が建っていた。いずれも私のいう彩色鮮やかな巨大木造建築であった。先的小林氏は『興福寺流記』所引の「宝字記」によってこれら堂塔の造営を検討し、まず東金堂は養老七年（七二二）着工、神龜三年（七二六）完成、五重塔は神龜四年着工、天平二年（七三〇）完成、西金堂は天平三年着工、天平六年完成と結論づけた。<sup>21</sup>

このような小林説に異論はないが、興福寺には金堂と講堂の三方を、東室・西室・北室の三面僧房が取り囲み、講堂の東には食堂があった。天平六年に西金堂が完成したのちの、天平七年からおよそ八年をかけて、天平十四年ごろまでには食堂と三面僧房は完成していたのであろう。慶雲四年から数えると、興福寺の造営工事はおよそ三十五年をかけて終了したのである。

## おわりに

国家官寺の平城京への移転について、大安寺、元興寺、そして藤原氏の興福寺を検討してきたが、いずれにも共通することは寺院の中心堂宇たる金堂は五間四面の規模で、本尊は丈六仏である。さらに講堂は七間四面で、回廊は複廊であった。つまりこうした堂宇の規模や本尊の大きさを国家官寺規格と呼ぶべきもので、薬師寺もまた然りである。

このような中で興福寺があたかも国家官寺のごとく登場できたのは、藤原不比等という権力者が策略を講じたからにはかならない。官宮工房たる造寺司のエリート工人たちを動員して興福寺を造営したことは、現存する八部衆像や十大弟子像を見れば誰もが納得できよう。おそらく不比等は遷都の計画がおこると、念願の藤原氏の氏寺として興福寺を新京随一の形勝の地に創立することをいち早く決意し、藤原京時代の造大官大寺司と造薬師寺司のエリート工人をあつめて興福寺造営集団を組織したのであろう。同様にして元興寺の場合も造元興寺司が設置されたのである。

つまり、平城京への国家官寺の移転工事を担当したのは、造大安寺司・造薬師寺司・造元興寺司、それと興福寺造営集団であった。

そのうち興福寺の造営開始は和銅三年（七一〇）の平城遷都に先だが、大安寺は和銅四年ごろ、薬師寺は和銅六年ごろ、元興寺も和銅六年ごろであった。これからおよそ三十〜四十年間もの長期間、

国家官寺の造営はほぼ同時進行で実施されたのである。

平城京のような狭い地域で、四つの寺院が同時進行で造営されたことはかつてなかった。これはまさしく巨大木造建築の競争、競争であった。建築だけでなく仏像も、等身大のものから丈六仏まで各種つくられた。このような競争原理によってエリート工人たちの技量が上がったことから登場したのが天平美術である。勿体無いと思えた平城遷都が天平美術を生み出す原動力となったのである。

## 註

- (1) 岸俊男『日本古代宮都の研究』（岩波書店、一九八八年）。
- (2) 高島正人『藤原不比等』（吉川弘文館、一九九七年）。
- (3) 拙稿「百済・日本への南朝仏教美術の伝播と受容」（『アジア地域文化学の構築—21世紀COEプログラム研究集成—』アジア地域文化学叢書1、雄山閣、早稲田大学アジア地域文化エンハンシング研究センター、二〇〇六年）。
- (4) 拙稿「飛鳥寺の発願と造営組織」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』四一—三、一九九五年）。
- (5) 木下正史『藤原京』（中央公論社、二〇〇三年）。
- (6) 拙稿「飛鳥寺の創立に関する問題」（『佛教藝術』一〇七、一九七六年）。
- (7) 小林裕子「興福寺の草創を語る史料について」（『美術史研究』四三、二〇〇五年）。
- (8) 福山敏男「大安寺及び元興寺の平城京への移建の年代」（『史蹟名勝天然記念物』一一—三、一九三六年）。
- (9) 太田博太郎「南都七大寺の歴史と年表」（岩波書店、一九七九年）。
- (10) 太田博太郎、註（9）前掲著書。

- (11) 毛利久「大安寺仏門回廊の安置像について―いわゆる大安寺式伽藍配置の検討―」(『古代学』一一三、一九五二年)。
- (12) 太田博太郎、註(9) 前掲著書。
- (13) 毛利久「大安寺安置仏像の復元」(『日本史研究』三、一九四六年)。
- (14) 福山敏男「飛鳥寺の創立に関する研究」(『史学雑誌』四五―一〇、昭和九年)。太田博太郎、註(9) 前掲著書。
- (15) 『日本霊異記』中巻「己が高徳を恃み、賤形の沙弥を刑ちて、現に悪死を得る縁 第一」に、「諾楽の宮に宇の大八嶋国御めたまひし勝宝応真聖武太上天皇、大誓願を發し、天平元年己巳の春二月八日を以つて、左京の元興寺に大法会を備けて、三宝を供養す」とある。
- (16) 『七大寺日記』元興寺条。
- (17) 稲森賢次「元興寺塔址埋藏品出土状況報告書」(『奈良県史蹟名勝記念物調査報告』一一、一九三〇年)。
- (18) 太田博太郎、註(9) 前掲著書。
- (19) 太田博太郎、註(9) 前掲著書。
- (20) 小林裕子「平城京における興福寺の造営開始時期」(『奈良美術研究』七、二〇〇八年)。
- (21) 小林裕子「興福寺東金堂・五重塔・西金堂造営とその意義」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第三分冊、五二、二〇〇七年)。